「悪しき者のはかりごと」

詩篇１：１－２

January.12.2025

詩篇１：１－２（パワポ）

Preface

詩篇１篇は、「幸いなことよ」という魅力的な言葉から始まりますので、そのすぐ後に続く言葉も、積極的な能動的な言葉が続くと思いきや、否定的な言葉が続きます。

「幸いなことよ、悪しき者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、嘲る者の座に着かない人。」

私たちは、あまり否定的なことを好まないように思いますが、この詩篇１篇のみならず、聖書はいつも、「～してはならない、～であってもいけない」というような否定的な表現を用いて語り掛けてきます。

なぜなのか？

なぜ、肯定的な言葉よりも、否定的な表現を先に用いるのでしょうか？

Part One

いくつか理由があると思いますが、一つ目の理由は、聖書という書物が、この世に存在するどんな本・書物よりも現実的な書物だからだと思います。

聖書はいつも、この世のあるがままの姿、一切の装飾をしない現実の姿から出発をします。

ここ最近、私個人的にイザヤ書を読み進めているのですが、イザヤ書の３０章を見てみますと、神の言葉を真っすぐ語ろうとする預言者たちに対してイスラエルの民が、「我々に心地よいことを語りなさい。だましごとでもいいから」と、脅しをかけた事実が記録されています。

神の言葉を慕っているはずのイスラエルの民でさえも、こんなことを口にしてしまう程に、私たち人は、あるがままの酷い醜い自らの悪しき現実に目を向けることをあまり好まないように思います。

出来ればカッコいい青写真を描き、ビジョンを抱き、夢を持ちながら、「麗しい幸せを掴もうではないか」と始めようとします。

ところが、これこそが、私たちが幸せを掴むことが出来ない最も端的な理由であると語るかのように、聖書は、この世の、この世に生きる私たち人間のあるがままの苦みと呪いに満ちている現実から話しを始めます。

聖書は、私たち人間を、真っすぐにあるがままの姿・現実と対面させようとなさる、至って、正直な書物だと思います。

二つ目の、聖書がいつも否定的内容から始める理由は、エレミヤ書１７：９に

エレミヤ書１７：９（パワポ）

とありますように、私たち人間の生き様そのものが、悪しき者のはかりごとであり、罪人の道であり、嘲る者の座に着いたようなものであるためなんだと思います。
聖書は最初から最後まで一貫して、「自らの罪を悟らずして、何の希望も持ち得ない」と語ります。

私たち人間が、先ず何よりも真っ先に気付かなければならないのは、「この世界自体が道を誤っており、人の心が思い図ることは幼いときから悪であり、神が地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛めるほどにこの地は堕落し、暴虐で満たしてしまっている張本人が、私自身、私たち一人一人自身である」と語ります。
「この世界、人生、中々いいじゃないか！」と人は言うかもしれませんが、聖書は、「いや人は、人生は、悪しき者のはかりごとであり、罪人の道であり、嘲る者の座に着いている」ようだと、正面切って真っ直ぐに正直に語りかけてきます。

三つ目の、聖書がいつも否定的内容から始める理由は、神さまが人のたましいを扱う医者であられるとするならば、治療をする前に、先ず診断から始めなければならないからだと思います。

人が病に罹った時、鼻くそ丸めて万金丹ではありませんが、何でもいいからとりあえず闇雲に薬を投薬するのではなく、どんな薬を、どれだけの量、どれだけの期間、どのように投薬することが患者にとって最も適切なのかを的確に診断し、治療しなければなりません。
何でこんな症状が出ているのか、何が原因なのか、どうすれば治るのかを、もしお医者さんが適当に扱うならば、安心して身を任せることは出来ません。
今ある目の前の問題を正直に直視することから、治療は始まります。

病気に関しては、私たち誰もが、医者が、正直に真っすぐに的確に診断し、治療してくれることを望みますが、たましい、霊のことについては、診断を正直に真っすぐに的確に下されることを、プライドが邪魔するためなのか、それまで培ってきた人生観や世界観や価値観や色眼鏡のせいなのか、あまり好まないように思います。
「いやいや、まだまだ、この世の中希望あるよ。　人間まだまだ捨てたもんじゃないよ。　私だって捨てたもんじゃないよ。　人間が作った文明社会ってすごいでしょ！　人間って、なんだかんだ言って、すごいんだよ」と、サタンがイエス様を誘惑する時に使った言葉と手段を、人間も知ってか知らずか同じように使いながら、この世に対する、人に対する、そして自らに対する正直で、的確な

診断を避けようとしがちなのかなと思うのです。

マタイの福音書４：８－１１（パワポ）

サタンは、この世の悪を直視させようとはしません。
この世のことを「栄華」と言い、「欲しいだろ？」と誘惑をします。
でも、イエス様は、「この世に栄華はない。有るのは、神を忘れた、ちりあくたのような堕落と暴虐だ」と仰います。
神が説く「幸い」でありたいならば、まず、その原因を探り、現実を直視しなければなりません。

四つ目の理由は、現実を前にしたならば、神の前にあって悔い改めるためです。
バプテスマのヨハネが、その働きを始めた時に人々に向かって宣言したのが、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」でした。
イエス様も３年間の公生涯を始めなさった時、初めに世に向かって告げ知らせたのが、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」でした。

そしてもう一つ、聖書がいつも否定的な言葉から始める五つ目の理由は、「神さまがお与えなさるいのちと救いの道は、私たちが今まで知り習得してきたどんなものとも全くもって違う、本質的に、根本的に次元が異なるという事実を教えよう」としておられるからだと思います。
「幸いへの道は、あなた方がいつも考えて来たようなものとは、全然全くもって違います。もしあなたが、わたしのところに来て聞くならば、驚くことでしょう。これまで全然聞いたこともないようなことを聞くことになります。今まで想像すらも出来なかったような革命的なことを、全くもって別世界から来たような話を聞くかのような思いで、聞くことになるでしょう」と、聖書は語ります。
聖書は人の言葉ではなく、神の言葉であり、この地に属すものではなく、天から下りて与えられたものです。
世が教えることと、根本的にその内容が違うということに気付かされます。

私が１０年前、燃え尽き症候群のような状態になってアメリカに行った時、「改めて聖書をゆっくりちょっとづつ読んでみよう」と思い読み始めたのですが、イエス様の仰っていることが全然理解出来ない、「この人、ちょっと頭おかしいんじゃないだろうか」と思えてしまったことがありました。
理由は明白でした。
私が思っていたのは、この地のことだったからです。
「この世界の常識、人から教えられ、宣伝され、啓蒙され、知り習得してきた人が唱える真理のようなものや楽しみや喜びや幸せという観点で、イエス様の言葉を推し量ろうとしているから全然理解出来ないんだ」ということに、徐々に気付かされていきました。
使徒パウロ先生が、コロサイ３章で、「あなたがたは、上にあるものを求めな

さい。キリストが神の右の座に着いておられる上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません」と仰っていますが、地上のことを思い、地上のことに対する嫉妬と憧れと羨ましさに心が支配されていたために、イエス様の言葉が理解出来なくなってしまっていました。

聖書の語る祝福と世の語る祝福、聖書の語る幸いと世の語る幸いは、比較すら出来ない程に違う神の道であり、唯一無二の道だと、聖書は語って下さいます。

Part Two

次に、これらの聖書が否定的な内容から語り始める五つの理由を踏まえた上で、詩篇１篇が語る否定的な内容、私たちが、神さまが説いて下さる幸いであるために、避けるべき具体的な事柄について見てみたいと思います。

詩篇１：１（パワポ）

一つ目は、「悪しき者のはかりごとに歩まず」です。
「悪しき者」とは誰を、どういう人を指すのか、聖書の語る「悪しき者」とはどう人なのかを聖書の言葉から探ってみたいと思います。
詩篇１１９篇を見てみましょう。
（詩篇１１９篇も「幸いなことよ」という言葉から始まる代表的な聖書の言葉です。）

詩篇１１９：５３（パワポ）
詩篇１１９：１５５（パワポ）

この詩篇１１９篇が指し示す「悪しき者」とは、神の教えを捨てる者、神の言葉に価値を見出せない、見出さない、神の言葉を求めようとしない者のことです。
悪しき者は、神の言葉を求めないがために、神の救いからも、遠く離れた状態にあると言います。
もう一箇所見てみましょう。

詩篇１０：４（パワポ）

悪しき者とは、「神はいない」という人、すべてのことです。
世で言う悪人よりも、はるかに、範囲が広いものです。
唯一まことの神の存在を認めない、認められない、認めたくない人、神の前にあって、自らの貧しさ、罪深さ、ズルさを認識出来ない、認識したくない人、そのすべてを「悪しき者」と言います。

「神はいない」という思いや姿勢がどこに表れるのかと言うと、「顔に表れる」と言います。

顔ということは、外に向かってということだと思いますが、外とは、人に対してということ、人に対して、「『神がいない』という高慢が表れてしまう」と言うんです。
ということは、私たちのすべての争いごとというのは、「神がいない」というその高慢な思いから出てくるものだということになるでしょう。

また、「神がいない」と神を恐れる代わりに人を恐れるがために、人に向かって自分を恐れさせることを、あの手この手を使い、大なり小なり、知ってか知らずか、無自覚で日々の暮らしの中に表してしまうのが、「悪しき者」なんだと思います。
最近、不機嫌ハラスメントやサイレントハラスメントという言葉を聞いたのですが、これは、人を恐れさせることの出来る条件が自分に備わっていないと感じると、不機嫌な態度や言動を取って、または黙るという静かな威圧を用いて、相手に気を使わせ、不快感や精神的な苦痛を与えようとする行為なんだそうです。
「人はどこまでも巧妙で、「神はいない」という高慢を表してしまう者なんだ」と、私自身の姿をも顧みる思いがしました。
私たち人間の色んな所に、「神はいない」と無自覚で体現してしまう「悪しき者」としての特徴が表れます。

また、「悪しき者のはかりごと」の「はかりごと」と訳されているヘブル語の言語は、「エチヤ」という言葉で、所謂「悪いこと、重犯罪」等を指す言葉ではなく、深く私たちに根付き、普通になってしまっているようなことを指します。
つまり、認識出来ない程に常識化した私たちの日常生活に深く根付き、定着し、染み付いている習慣、習わし、当たり前になってしまっているようなこと、普通を装っているようなことを意味します。

例えば、「幸いになるためには、お金が必要だ」というようなことです。
ある意味もうこれは、「哲学だ」とも言えるかもしれません。
お金は大事、お金は力、お金は権力、お金には魅力がある、お金がすべて、お金があれば欲しい物なんだって手に入る可能性が比例して高くなる等々、幼い子どもでも、お金の力を知っています。
でも、イエス様は、「地上の宝を蓄えるのはやめなさい。自分のために、天に宝を蓄えなさい」と仰いました。

「人の幸いにとって大事な要素のうちの一つになるのは、人間関係だよ。人間関係を円滑にすることこそ、大事なことだよ。」
または、「家族を大事にすることこそ、人間関係の中で最も大事なことだよ」という良識ある常識。
これについても、イエス様は、「わたしよりも人を、わたしよりも夫と妻を、わたしよりも父や母を、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわし

いものではありません。わたしのために、福音のために、家、兄弟、父、母、夫、妻、子ども、畑を捨てた者は、その何倍も受け、また永遠のいのちを受けます。神を愛しなさい。そして、人を愛しなさい。神を愛しなさい。すると、人を愛せます」と、仰います。

「自分を信じて！　自分を信じることこそが、幸せを生きる秘訣だから！」というようなことを色んなところで見たり聞いたりしますが、イエス様は、「自らの貧しさを神の前に認められるものは幸いです。　主なる神様を待ち望むすべてのものは幸いです。　神を愛しなさい。　私たちが、私たち自身を信じた先にあるのは、土のちりです。　神を信じた先にあるのが、揺るぐことのない神の前にある『生きることはキリスト、死ぬことは益です』という自己肯定感です」と教えて下さいます。

「悪しき者のはかりごと」とは、「神はいない」とする世や人が、人が幸いになるために必要だと挙げるそれらしい事柄、常識、当たり前になっているような目標を指します。
ゆえに、「悪しき者」は、自分の知恵を信じます。
自分の利口さを頼りにします。
自分がそれまで蓄えてきた知識を信じます。
「なんで教会なんか行くの？　時間の無駄でしょ。　そんな古臭い聖書なんか読むことに、もったいない時間を使わない方が良いんじゃない。過去のどの時代よりも文明の粋を極めたこんな時代にあって、聖書なんていう時代遅れのものは完敗して崩れ落ちたんだから。その中には、学べることなんか何にもないし、神を信じるより、自分自身を信じなさい」と、世の中至る所で叫ばれています。

さらに、「悪しき者」と訳された言語には、「不安」という意味合いがあります。
つまり、「悪しき者」の特徴のうちの一つが、「不安だ」ということです。
確固たるたるものがない、知っているようで知らない不安ですね。
時代の流れに従って、蓄えた知識を変え、考えを変え、いつも不確実な中を生きなければならない不安です。
かつては、原子が、物質の最小単位だと考えられていましたが、今では、そんな非常識通用しません。
時の流れと場合によってころころ変わる常識、普通を装ったもの、「悪しき者のはかりごとに歩まない」ことが、幸いです。

Part Three

詩篇１篇の二つ目の教えは、「罪人の道に立たず」です。
罪人は、自分の肉体のために生きます。
食べて、飲んで、自分の目の欲するものは何も拒まず、自分の心を信じて、心の赴くままあらゆることを楽しみ、自分が考える自分にとっての快楽を味わうことが目標です。

もちろん、禁欲を勧めているわけではありません。
神さまは、伝道者の書で、

伝道者の書５：１８－１９（パワポ）

と、「この地にある良き楽しみを大いに楽しみになさい」と仰って下さっていますが、その真意は、

伝道者の書２：２５（パワポ）

ですね。
イエス様の放蕩息子の例え話に出て来る放蕩息子は、父から離れて、大いに飲み、大いに食べ、大いに着ることを謳歌することが自由だと思い、家を出て行きましたが、それを求めれば求めるほど、父から離れれば離れるほど、家から離れれば離れるほどに不自由になり、束縛に陥り、空しさと喪失感と虚脱感に絡み取られて行きました。

この話をもって、イエス様が私たちに教えようとしておられることは、「自由とは、神のもとに走り寄っていくこと、立ち返ること、帰ること」、「堕落とは、神から与えられた良いものを神のためではなく、自分のためだけに用いること」、「放蕩とは、神から離れて行くこと」なんだと思います。
人は、飲んで、食べて、着て、住む楽しみを神さまから許され、それらを通して喜ぶことを神さまは微笑ましく思って下さいますが、「神から離れては、飲んで、食べて、着て、住むということを通して掴んだと思った瞬間、幸いが無いことに気付くようになっている」ということだと思います。

「肉体のために生きる罪人の道に立たないこと」、即ち、神さまから、イエス様から離れないこと、幸いの必須項目です。

そして、三つ目の教えは、「嘲る者の座に着かない」ということです。
嘲る者とは、誰のことでしょうか？
嘲る者とは、聖なることや神聖なことを、まことの神以外に見出すもののことでしょう。

唯一まことの神を信じることを冷笑する者、神の教えとおきてといましめとさとしと道とさばきとを蔑み、見くびる者。
そして、冷笑し、蔑み、見くびる、そのような態度や姿勢を自己表現だと宣う人のことを、嘲る者と言うのだと思います。

自己表現が、神を勝る時代。
いつでもそうだと思いますし、いつの時代も、人はそうしてきたのだと思いま

す。
　しかし、神なき自己表現に幸いはありません。
　神とともにあって、キリストとともにあって、初めて人は、その人らしくなれるとも、聖書は語りかけて下さいます。

Conclusion

　「歩まず、立たず、着かない人」と否定表現を用いて、幸いな人を語ってきましたが、遂に２節で、肯定的な表現を用いて、幸いな人を言い表します。

詩篇１：２（パワポ）

　主のおしえを喜び、口ずさみ、思い巡らす人。
　１節の「歩まず、立たず、着かない人」という否定表現を逆にした人。
　つまり、主のおしえに歩み、主のおしえに立ち、主のおしえに着く人。
　その人こそ、神の説く、幸いな人だと言います。

　人が説く、人の求める、人が考える、人が目標とする幸いではなく、神が教えて下さる幸い。
　神の教えが喜びとなる幸いな人。

　神の教えが喜びとなるというのは、人のわざではなく、神の御業だと思います。
　そんな神の御業が、イエス・キリストの私たちの霊たましいへのタッチがありますよう祈っていきたいと思います。
　神の教えが喜びとなる恵み、幸いに与らせて頂きたいと願います。

　お祈りいたします。
　祝祷：詩篇１：１－２